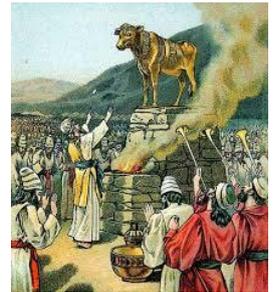


そろそろ大学の入試が始まっているようです。みんなの場合、入試で学力だけではなく人柄も見てくれたらいいのに、と思いますが・・・。ただ、大学の先生や企業の人事担当の人に聞くと、学力だけでなく、積極的な性格の人が欲しいというのをよく耳にします。10数年前、京大文学部の教授に「最近の大学院生はどう」と尋ねたら、「指示待ち症候群や」と言われました。つまり、自分から何かをするのではなく、先生から言われることを待っているということです。大学院生だから22歳以上の青年です。それがこれなら困りものです。昨年、別の先生は、霞ヶ関の官僚（優秀な人材が一杯のはず）と話をすると、自分の出世のことしか頭になくて、この国をよくしたいという志を持っている人が少ないと歎いていました。みんなには自分のよい性格を伸ばして、ソクラテスの名言「ただ生きるのではなく、よく生きることが大切」を忘れず、よい社会を作ろうという志を持つ仕事人になって欲しいです。

さて、今まで二回にわたってキリスト教はユダヤ教とつながっていることを見てきました。ユダヤ教の経典は『旧約聖書』ですが、キリスト教も『旧約聖書』も大切にします。旧約聖書と呼ばれる書物は、実際は多くの書物の集まりで、千年以上の気の遠くなるような長い期間にわたって編纂されて来たものです。その大部分は神とユダヤ人との関わりを語る歴史ですが、こういうことがあった、ああいうことがあったと述べる歴史叙述だけではなく、神への祈りを集めた『詩編』、先日から話している預言者たちの言葉、あるいは格言集というジャンルもあります。

ところで、『旧約聖書』を読むと、ときどき神が怒るという表現が出てきます。モーセが十戒を受けるためにシナイ山の上にいる間、山麓で待っていたユダヤ人たちはモーセの帰りが遅いのでしびれを切らし「我々の先頭に立っていかれる神を作ろう」と言って金の雄牛の像を作り、その前にひれ伏しどんちゃん騒ぎをします。それに対して神は「私の怒りは彼らに向かって燃え上がる。私は、彼らを滅ぼし尽してしまおう」（脱出の書、32章10）とモーセに言います。神は悪事を行った者を罰されましたが、モーセの取りなしに免じて全員を滅ぼすことはなさいませんでした。しかし、民が罪を犯し、それに対して神の怒りが燃え上がり罰を下すことは、その後の歴史にもたびたび繰り返されます。そのあげくに、とうとう紀元前586年、ユダヤ人はバビロニア帝国によって国を滅ぼされ、バビロンに連行されてしまいます。



このほか、旧約聖書には、神が町を全滅させるように命じることも出てきます。あるいは、アブラハムやヤコブ、ダビデ王といった立派な人たちですら、複数の妻を持っているということがあったし、さら離婚も一定の条件下で認められていました。これらのことを根拠に、旧約時代の神とキリストが説いた新約の神とは別物だという人が出ました。つまり、新約のキリスト教の神は「愛の神」だが、旧約の神は「怒りの神」である、と。その代表者が、紀元3世紀にメソポタミアで仏教、ゾロアスター教とキリスト教を混ぜて新しい宗教を作ったマニという人です。このマニ教は善の神と悪の神を信じる二元論をとり、旧約の神と新約の神を対立させました。12、13世紀に南ヨーロッパで広がり、カトリック教会の脅威となったカタリ派という異端もこのマニ教の影響を受けて、同じ事を主張します。最近では『不思議なキリスト教』という本を出した橋爪大三郎という有名な大学教授が「旧約時代の神と人間のよそよそしい関係を打ち砕こうとイエスは「愛」を述べて大転換が起こった」と言っていますが、それ

はマニ教の古い説の蒸し返しです。

このような旧約と新約を別物と見る考えに対しては、キリスト教は最初から反対しています。キリスト教も根本的な主張は、神がユダヤ人を少しずつ教育していったということです。人間の場合でも相手が子供と青年では教える内容も教え方も異なります。例えば、小学一年生には足し算引き算を教えるでしょうが、高校3年生だと微分積分を教える。また幼児がわがままを言うなら、大人は多少厳しい態度でしかるでしょうが、相手が高校生なら落ち着いて説明するでしょう。これと同じで、紀元前千年以上の昔、まだ周辺世界の民族の道徳や習慣のレベルが低かったとき、いきなり博愛の精神や一夫一婦制を説いても、ユダヤ人には難しすぎて実行はできなかったに違いありません。



神がユダヤ人に少しずつ教えていったことを示す例は、他にもたくさんあります。一つは、死後のこと。一番古い時代では、人が死ぬと、彼が善人であろうが悪人であろうが、「先祖とともに眠りについた」としか書かれません。つまり、死後の賞罰には触れていません。しかし、後の時代になると人が死後に賞罰を受けることができます。例えば、「正しい人の靈魂は神の御手にあり、どんな苦しみもそれに触れ得ない」（知恵の書、2章1）。他方、「悪人は自分たちの思いに似つかわしい罰を受ける」（知恵の書、3章10）のです。

旧約の神は怒りの神かという問題に戻りますが、旧約聖書にも「神が愛である」ことがしばしば出てきます。例えば、イザヤ書には「シオン（ユダヤ人のこと）は言った。『主は私を見捨て、私を忘れられた』と。女が乳飲み子を、母がふところの子を忘れようか。よし忘れる者があっても、私は忘れない」（49章、14~15）。これは神がユダヤ人たちに対して母親が幼子に対する以上の愛を持っているという意味です。紀元前6世紀のエゼキエルの書には「私が悪人の死を喜ぶだろうか。むしろ彼がその生き方を変えて生きることをこそ喜ぶ」（18章、22）とあります。

また神は弱い立場にある人に対して優しく振る舞うことを命じます。「外国人を苦しめたり、困らせたりしてはならぬ。おまえたちもエジプトの地では外国人として住んでいた。夫を失った女や孤児をいじめてはならぬ。…私の民である貧しい者に、金を貸すときには、厳しい金貸しのように振る舞ってはならぬ。このような相手からは利子をとってはならぬ。隣人が身にまとうものを質にとったならば、日暮れまでに返してやれ。それは彼の身を覆うたった一つのものであり、彼の肌に着るたった一つの衣服である。それがなければ、何をかけて寝ることができるか。彼が私に助けを求めて叫んだなら、私は必ずその叫びを聞きつける。私は憐れみ深いものだからである」（脱出の書、22章21~26）。

あるいは「断食をしたのに神は聞き入れてくれない」と文句を言うユダヤ人に対し神はこう答えます。「見よ。おまえたちは争い喧嘩しながら、貧しい人たちをこぼして打ちながら断食する。…私の望む断食がそれだろうか。…パンを飢える人に分け、屋根を持たぬあわれな人を宿らせ、裸の人を見て服を着せ、肉親の者をないがしろにしないこと、これではないか」（イザヤ、58章4~7）。

このように旧約聖書にも神の愛や憐れみは至る所で見いだされます。この点は新約時代になってよりはっきりするとはいえ、それは旧約時代からの大転換ではなく、旧約の延長に位置するものです。「新約が旧約のうちに秘められ、旧約が新約のうちに明らかになる」（アウグスティヌスの言葉）。